

『林勿郵殿撰贈琉球中山王詩書卷』について（上）

崎 原 麗 霞*

Collected Poems of Linbutusun to the King of Ryukyu Chuzan (Part I)

Reika SAKIHARA*

はじめに

琉球国とは、1429年に尚巴志王が南山を滅ぼし三山を統一してから、1879年の明治政府による琉球処分まで、約500年間琉球諸島に存在した国家をさす。15世紀に中国の冊封国となり、1609年に起きた島津の琉球侵攻後は薩摩にも服属するようになった。

冊封とは「中国では諸侯、太子、皇后などを任命することであるが、琉球では中国皇帝が琉球国中山王を封することである。（中略 筆者）冊封を宣するための使者が冊封使である。冊封使が来島すると、まず先王の諭祭がおこなわれ、次に冊封の式典が挙行される」¹という。

一方、冊封使は先王の諭祭²、新しい国王の冊封以外に、滞在中に見聞した多くの事柄を記録している。それを『冊封使録』という。現在確認できる最古の使録1534年に尚清の冊封使の陳侃が書いた『使琉球録』である。清代に入ると、進士と呼ばれるエリート官吏が冊封使に任命されるようになる。進士とは「中国で、隋・唐代、科挙の科目の一。文学を主とする科目。後にその合格者をもいう。宋以後は鄉試・会試（省試）・殿試の3段階すべてに合格したものをいい、仕官の登竜門」になっていた³。

「林勿郵殿撰贈琉球中山王詩書卷」（林勿郵殿撰の琉球の中山王に贈る詩書卷）は冊封正使林鴻年が尚育王に贈呈した詩書卷をいう。「勿郵」は字。「殿撰」は科挙試験における進士の状元（首席合格者）の通称である。

尚育の冊封（1838、道光18年）は尚顥の冊封（1803 嘉慶13年）以来、30年ぶりの冊封になって

いる。1838（道光18年）に尚育即位3年後、正使林鴻年（翰林院修撰）、副使高人鑑（翰林院編集）が率いる使節団が旧暦5月9日に琉球につき、6月24日に先王尚灝を諭祭し、8月3日に新しい国王尚育への冊封を終え⁴、10月12日に琉球から帰国の途につく⁵。林鴻年は道光16年の科挙試験における進士の状元（首席合格者）であった。

林鴻年に関しては『沖縄大百科事典』においては「生没年未詳」⁶とされているが、中国の文献資料⁷で調べた結果を以下に略記する。

林鴻年（1805～1885 享年81歳）は字勿郵。侯官（今の福建閩侯県）生まれ。清の道光16年（1836）丙申恩科状元。後、修撰を授け、道光18年冊封正使として、副使の高人鑑と共に琉球に渡った⁸という。琉球から帰国後は、国史館協修、文淵閣校理、方略館纂修、広東瓊州府知府、雲南按察使、布政使、雲南巡撫を歴任。

琉球での活動について『沖縄大百科事典』においては、[琉球に滞在中、瑞泉に題して「源遠流長」の四字を書して献じたので、これを石に刻し瑞泉の上に立てた（龍樋の碑）。また〈諭して字紙を敬惜するを勧む〉の文を書き、フンジル（焚字炉）をつくることをすすめた。『球陽』では1839年（尚育5）に焚字炉を創建したと記している。琉球では、これ以後本島内の村々や、宮古・八重山までも焚字炉が設けられた。]⁹という。しかし、帰国後編集した使録は、28年後（1866年）尚泰の冊封使である趙新が記した『續琉球國志略』においては「林勿郵中丞所著錄者未見」（林勿郵中丞が著した使録は確認

* 〒685-8550 鳥取県鳥取市湖山町南4丁目101番地 鳥取大学国際交流センター
Center for International Affairs of Tottori University, 4-101, Minami Koyama-cho, Tottori 680-8550, Japan

できなかった）とされている¹⁰。

「林勿郵殿撰贈琉球中山王詩書卷」は林鴻年が尚育王に贈呈した詩書卷である。林鴻年の使録が散逸した故、その琉球滞在中に綴られた「始相見」「諭祭禮成」「冊封禮成」「題蓉桂二截句」「中秋宴」「重陽宴」「留別五十韻」「九月四日承惠鞠華作歌報之」は文学的また冊封関係を研究する貴重な史料になっていると思われる。さらに今まで存在が確認されていなかったため、それに関する研究は空白のままである。本論は詩作の解釈を試みる。考察は、白文になっている詩文の区切り、語釈、現代文大意、要約で構成される。また、便宜上、長い本文を「始相見」「諭祭禮成」「冊封禮成」「題蓉桂二截句」「中秋宴」「重陽宴」「留別五十韻」「九月四日承惠鞠華作歌報之」に分け、前半の「始相見」「諭祭禮成」「冊封禮成」「題蓉桂二截句」「中秋宴」「重陽宴」を「上」の部、後半の「留別五十韻」「九月四日承惠鞠華作歌報之」を「下」の部とし、考察を進めていく。語釈に関しては『漢語大詞典 縮印本』『大漢和辞典』『広辞苑』『国語大辞典』『中日大辞典』『漢字源』『康熙字典』『中国語大辞典』などを参照している。なお、わずか数例ではあるが、筆記体の「茵」を印刷体の「葱」に、「啓」を「右」に「斜」を「斜」に置き換えたことをご了承いただき、浅学非才のため、多くの過誤があろうかと、専門家のご叱正を賜りたく思う。

第一章 考察

「林勿郵¹¹ 殿撰¹² 贈琉球中山王詩書卷」

原文

始相見

百靈趨擁詔書前 伏地呼嵩拜舞虔。
純素冠裳猶子志 茱茅爵士及丁年。
迎恩亭上春如海 敷命堂中日在天。
揖讓自深恭順意 分庭禮數肅班聯。

語釈

郵：村に同じ。『漢語大詞典 縮印本』下巻p6169

漢語大詞典出版社 2002年

勿村：林鴻年の字。

殿撰：状元の通称。

状元：中国で進士の首席合格者。

進士：中国で、隋・唐代、科挙の科目の一。文学を主とする科目。後にその合格者をもいう。宋以後は鄉試・会試（省試）・殿試の3段階すべてに合格したものをいい、仕官の登竜門であった。

百靈：百僚。百官。

趨擁：前へ進み出る。

詔書：中国皇帝の文書。ここでは琉球への勅書をいう。

伏地：地に伏く。

呼嵩：天子の長寿を祈って「万歳、万歳、万々歳」と称えること。

拜舞：拝む舞。

純素：真っ白。

猶：～如く。

苴茅：麻と茅。

爵士：官爵と領地。

丁年：壯年をさす。ここでは今日の意。

敷命堂：皇帝の命令を伝達する殿堂。

揖讓：古代、主・客が相対する時の礼。

恭：謹んで物をささげるような気持ち。

順意：従う意志。

分庭：平等な儀礼を交わす意。

肅：静肅。肅然。

班聯：朝見の行列。

大意

初めて会った時

勅書を前にした百官が地に伏して万歳を唱え、敬虔に拝んでいる。

純白な衣装と冠はその志を表し、中山王の官爵と領土は今日まで続く。

「迎恩亭」には春が海のように広がり、「敷命堂」には太陽が空高く昇っている。

儀礼を交わした中山王は恭順の意を表し、御庭に朝見の序列が静肅に並んでいる。

要約

勅書を迎えて琉球の役人が地に伏して敬虔に拝んでいる。中山王は皇帝に恭順の意を表し、朝見の列は静肅に並んでいるという初対面の光景が目に浮かぶ七言律詩になっている。

原文

諭祭禮成

錫類孝思邁禮經
一卣賚鬯霑仁粟
永翼孫謀修北面
吉蠲卜爾承天保

球陽先烈戴聲靈。
五廟升香薦德馨。
長流祖澤奠東溟。
福祿無疆荷綺齡。

語釈

諭祭：中国皇帝が功績のある臣下を祀る祭祀儀礼をさす。ここでは先王の尚育を祭る儀礼をさす。

錫類：善い仲間をたまうこと。

孝思：孝の思い。

邁：超える。

禮經：ここでは「礼記」をさす。

球陽：琉球の美称。

先烈：先祖の歎。遺歎。

戴：戴く。

聲靈：聲勢か。→聲勢：勢いのいい威力。

卣：神酒の容器。

賚鬯：賜った神酒。

霑：潤う。

仁粟：果物と食糧。

五廟：中国古代、諸侯の太祖の廟と二昭・二穆との併称。昭は左方の廟で第2代・第4代のもの、穆は右方の廟で、第3代・第5代のもの。

薦：しく。しき重ねる。物や力を広げてすみずみまで行きわたらせる意。

德馨：徳の香り。徳。

永翼：永く補佐する。助ける。支える。守る。

孫謀：子孫のための策略。

修：務める。

北面：臣下の列に居ること。また、臣下として君主に仕えること。

祖澤：先祖の恵

奠：さだむ。さだめる。

東溟：東の海。琉球をさす。

吉蠲：吉日。

爾：それ。

保：まもる。

無疆：無限であること。

荷：こうむる。恵みをうける。

綺齡：美しい年。冊封が行う年をさす。尊敬語。

現代文大意

諭祭の禮を成す

(王) 孝への思いは礼経¹³をしのぎ、先代の偉勲を戴く。

一卣の神酒は仁粟を潤し、王の徳は五廟¹⁴で焚かれている香のごとく広がっていく。

子孫への策略として臣下を務め、長く流れる先祖の恵みは琉球をさだめる。

吉日にそれを占い天の御加護を承り、王は無限なる福禄と冊封の恵みをこうむる。

要約

中山王の孝への思いは『礼記』を凌ぎ、先祖を祭る五廟で焚かれている香の如く徳が広がっていくという王の孝徳を詠う七言律詩。

冊封禮成

帶礪分疆宅大東 繼繩弼服世延洪。

鯢人貢道三山近 鳳綺恩光奕葉隆。

牛斗查邊齊拱極 車書海外久同風。

邦家勤儉年和稔 歳事時來慰聖衷。

語釈

帶礪：爵位が母国と共に続くという意。

疆：領土。

宅：住む。住まわせる。

大東：東の果て。極東。ここでは琉球をさすと思われる。

繼繩弼服：規定や礼儀を守り、中国皇帝からの恩賞が後世まで続く喻え。

延洪：永久に続く。

鯢人：琉球人をさす。

貢道：進貢の道。

鳳綺：帝王の詔書。

奕葉：代々。

牛斗：星宿の名。吉祥の証。ここでは冊封使をさす。

查邊：辺境を巡察する。

齊：整える。

拱極：附属する意。ここでは属国をさす。

車書：文化。

同風：文化が統一される意。

邦家：くに。ここでは琉球をさす。

和稔：実る。

歳事：一年中の出来事。

聖哀：天子のご心配。

大意

冊封の礼を成す

中山王の領土は東の果てにあり、皇帝からの恩賞は未永く続く。

琉球からの進貢の道は三山に近く、皇帝の勅書を賜り代々栄える。

辺境を廻る冊封使によって整えられ、車書（文化）が伝わった日が永い。

国は勤儉であり年は実り、歳時に都に上京し天子（皇帝）のご心配を慰める。

要約

中国皇帝に承認された王の爵位と領土は代々栄える。

勤儉である琉球は歳時のときに都に上京し、皇帝のご心配を慰めるという七言律詩。

題蓉桂二截句

水蓮開後木蓮開 佳氣蔥蔥島上來。

穠豔不須霜力拒 錦城雨露厚培栽。

雲階月地證崇班 一點丹心在小山。

更喜有聲馳下土 馨香飛達九霄間。

語釈

蓉桂二截句：詩体の一。絶句。

佳氣：吉祥の氣。

蔥蔥：忽々なる。茂っているさま。

穠豔：鮮やかな草花。

須：求める。

不：否定を表す。

錦城：美しい城。ここでは琉球をさす。

雲階月地：熟語。天上をさす。仙境。

崇班：高位。

一點：ほんの少し。わずか。

丹心：まごころ。赤心。

聲：皇帝の恵。

下土：都を離れた土地。

馨香：皇帝の恵

九霄：天の最も高い所。九天。

大意

蓉桂の二截句（絶句）を題す

水蓮の花が咲いた後は木蓮の花が咲き、佳氣の蔥蔥たる島に来たる。

鮮やかな草花は霜よけを求めず、錦城（琉球）には雨露の恵みが深い。

仙境は高位の証であり、中山王は一筋の真心を尽くしている。

皇帝の御声（恵み）が辺境の地を馳せることを喜び、その恵みは九天まで届く。

要約

大自然に恵まれている琉球は皇帝からの恵みも厚い。

琉球に与えられた高位から中山王の真心を見るという七言律詩になっている。

中秋宴

萬丈輝騰聖翰懸 雲梯高聳快瞻天。

雖殊將命威儀肅 自覺娛賓禮意虔。

帕首弓衣譚往事 銀花火樹燦華筵。

歸途又看蟾光滿 碧海金波四度圓。

語釈

萬丈：非常に高いことの形容。

輝騰：輝きが立ち上るさま。

翰：文書。

聖翰：聖なる文書。天子の詔書。

懸：高く揚げる。上にあげる。

雲梯：雲の架け橋。

高聳：高く聳える。

快：もはや。

瞻：見る。

雖：～といえども。接続詞。

殊：ことに。

將：もちいる。おこなう。

命：天子の命令。

威儀：重々しくいかめしい挙動。また、作法にかなつた立ち居振舞い。

娛賓：来賓を喜ばせること。

禮意：他に対して礼をつくしてへりくだる気持ち。
敬意。

帕首弓衣：ここではいろいろ飾って客を迎えることの形容。

譚：語る。

銀花火樹：きらきらと飾揚げて華やかなこと。

燐：きらびやかなさま。

華筵：華やかな宴。

蟾光：月の光。

碧海金波：青い海と黄金色に輝く波。

四度：四回。

大意

中秋の宴

万丈に輝く聖翰（皇帝の勅書）が掲げられ、高くそびえてもはや天に届く。

冊封の儀礼は厳粛に行われ、中山王は来賓（冊封使）に儀礼を尽くした。

正装に身を包みながら往事を語り、きらきらと宴は華やかに開かれている。

帰途に仰いだ満月は、四度も青い海と黄金色に輝く波をまるく照らす。

要約

冊封の儀式は肅々と行われた後は、使節を労う宴が華やかに開かれた。帰途に海と波を黄金色に照らす満月を仰ぎ、琉球にいる月日が四ヶ月も経ってしまったことに気づいたという七言律詩。

重陽宴

綵棚聯絡座凌波	金鼓和鳴答櫂歌。
似共東山童冠樂	不辭北海酒肴多。
櫻欄影戰斜風起	荷芰聲乾急雨過。
一路濃陰蒼欲滴	鱗鱗宮瓦正嵯峨。
尋源又到瑞泉門	揖讓樽前色笑溫。
此地登高同華嶽	多才能賦即梁園。
緩聲曹部聆新調	妙舞公孫羨慧根。
莫笑征夫思速駕	催詩重覺墨雲昏。

語釈

綵棚：綺麗に飾られた船または棚。

聯絡：つらなる。

凌波：美しい波。ここでは龍潭をさす。

金鼓和鳴：太鼓などで演奏する。

答：答える。

櫂歌：舟歌。

似：～のごとく。

童冠樂：士族少年の踊り。

辭：辞する。

北海：賓客を招待する意か。→北海樽：賓客を招待する盃。

櫻欄：やし科の常緑高木。

戰：ふるう。

斜風：そよ風。

荷芰：蓮の枝。

濃陰：茂っている草木。

鱗鱗：輝いているようす。

宮瓦：宮廷の瓦。

嵯峨：高く聳えている形容。

揖讓：儀礼を交わす。

樽：酒樽。

色笑：笑顔。

温：温かい。

華嶽：中国の山岳。

即：即席。

梁園：優れた文章の形容。

緩聲：やわらかい音楽。音律名。

曹部：官吏。

聆：聞く。

新調：新しいメロディー。

妙舞：美しい踊り。

公孫：貴族の血統。

羨：羨む。

慧根：天資。

莫：否定を表す。

征夫：旅人。ここでは作者自身のことをさす。

速駕：すばやく出発すること。

催：もよおす。

墨雲：雲のような墨跡。

昏：くらむ。

現代文大意

重陽の宴

飾りたてた舟を繋ぎ美しい龍潭に浮かべて、太鼓を

ならして舟歌に答える。

東山（士族）の少年の踊りを共に楽しみ、賓客を招待する酒肴を味わう。

櫻櫛が揺れ風が立ち、蓮の葉にわか雨が音を立て落ちる。

一路に茂っている草木が青々と滴れ、りんりんと光る王宮の瓦は入り乱れている。

源を尋ねて再び瑞泉門に辿り着き、樽の前に揖讓（挨拶）を交わした王の笑顔が温かい。

重陽の日に登高すれば中華の名山に登るが如き、王は多才にしてよく名文を即す。

和やかな音楽を聴き、美しい踊りを楽しみながら中山王の慧根（天資）を羨む。

早く帰国したい気持ちを笑うことなけれ、詩を催せば再び王の名文に眩みを覚える。

要約

龍潭に船を浮かばせ、酒宴を楽しむ。草木は青々と茂り、王宮の瓦はりんりんと光っている。瑞泉門で挨拶を交わした王の笑顔が温かい。重陽の日に登高すれば中華の名山に登るが如く、多才でよく名文を即する王の慧根（天資）を羨み、王の名文に眩みを覚えるという七言律詩。

（つづく）

- 1 『沖縄大百科事典 中巻』沖縄タイムス社 1983 P210
- 2 中国皇帝が功績のある臣下を祀る祭祀儀礼をさす。ここでは故琉球国王を祭る儀礼をさす。
- 3 『広辞苑 第五版』岩波書店 1998
- 4 趙新『續琉球國志略』沖縄県立図書館出版

昭和54年 P57～58

- 5 趙新『續琉球國志略』沖縄県立図書館出版 昭和54年 P134

- 6 『沖縄大百科事典 下巻』沖縄タイムス社 1983 P967

- 7 <http://www.fzbtv.com/fzzx/fgms/fg-13.asp>
http://www.sinology.cn/main/News_Print.asp?NewsID=427

- 8 偶爾讀書斎『清代狀元聯話之八』
http://www.sinology.cn/main/News_Print.asp?NewsID=427（以下は原文）

「林鴻年（1805～1885）、字勿郵、侯官（今福建閩侯縣）人。清道光十六年（1836）丙申恩科狀元。（中略 筆者）林鴻年中狀元後、授修撰、出任山東鄉試副主考官。歷充國史館為修、文淵閣校理、方略館纂修、廣東瓊州府知府、雲南按察使、布政使、雲南巡撫。道光十八年被任冊封琉球國之正使。（後略筆者）」

- 9 『沖縄大百科事典 下巻』沖縄タイムス社 1983 P967

- 10 趵新『續琉球國志略』沖縄県立図書館出版 昭和54年 P143

- 11 邮：村に同じ。（『漢語大詞典 縮印本』下巻 P6169 漢語大詞典出版社 2002年）

勿村：林鴻年の字。

- 12 殿撰：狀元の通称。

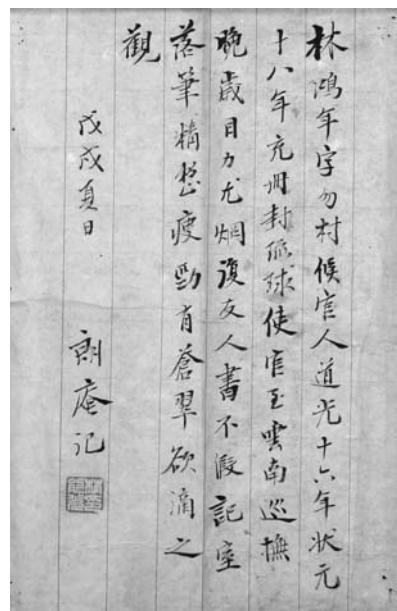
- 13 ここでは「礼記」をさす。

- 14 中国古代、諸侯の太祖の廟と二昭・二穆との併称。昭は左方の廟で第2代・第4代のもの、穆は右方の廟で、第3代・第5代のもの。

資料：『林勿郵殿撰贈琉球中山王詩書卷』



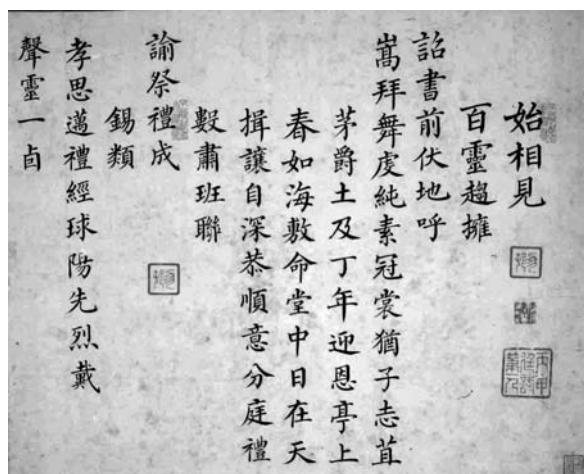
軸



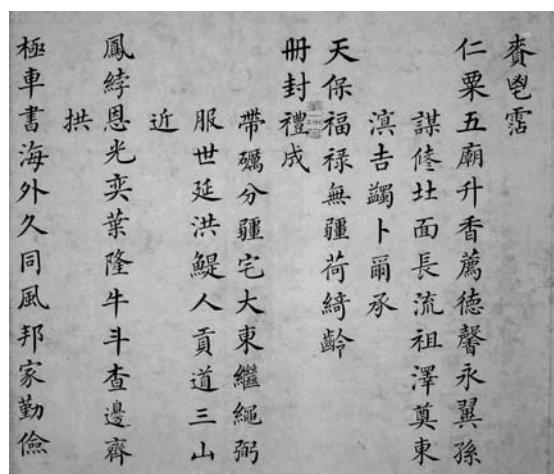
極書



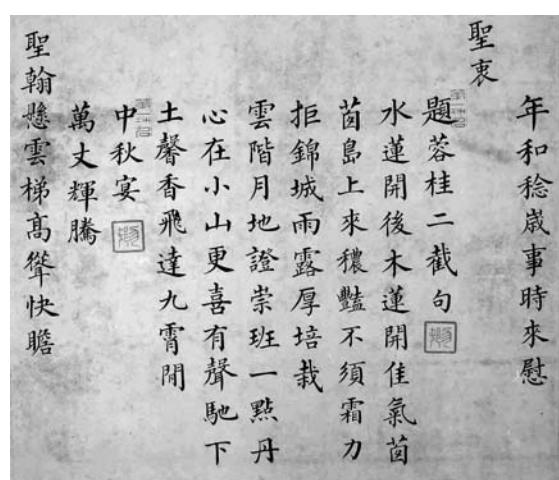
箱書き



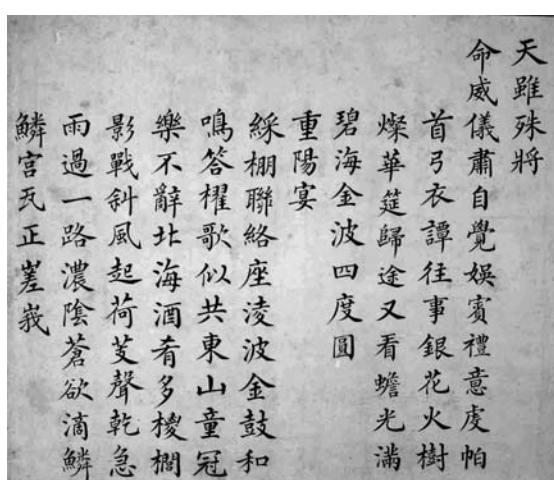
第一紙



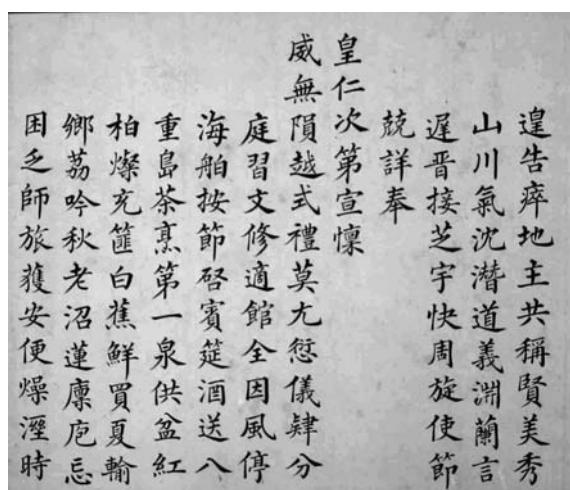
第二紙



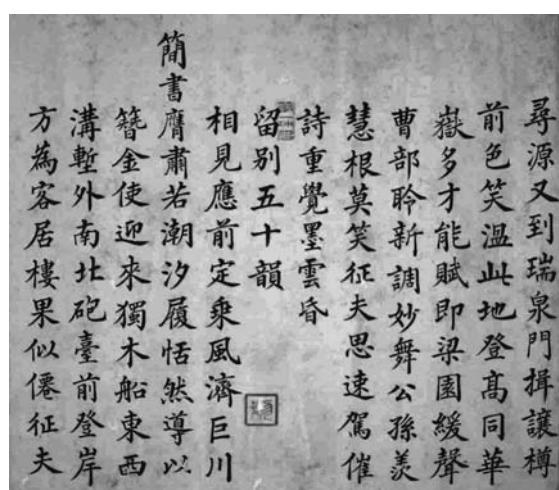
第三紙



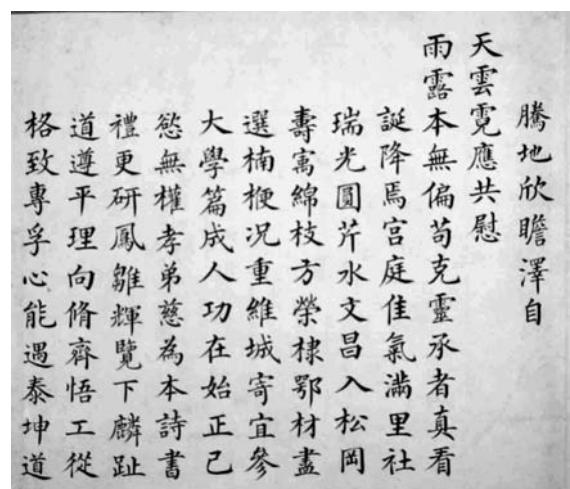
第四紙



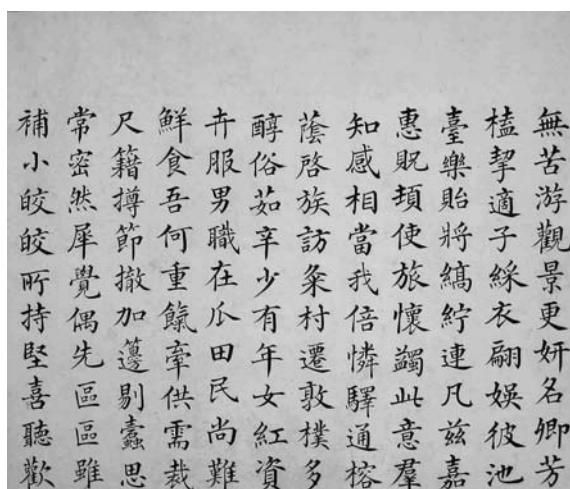
第六紙



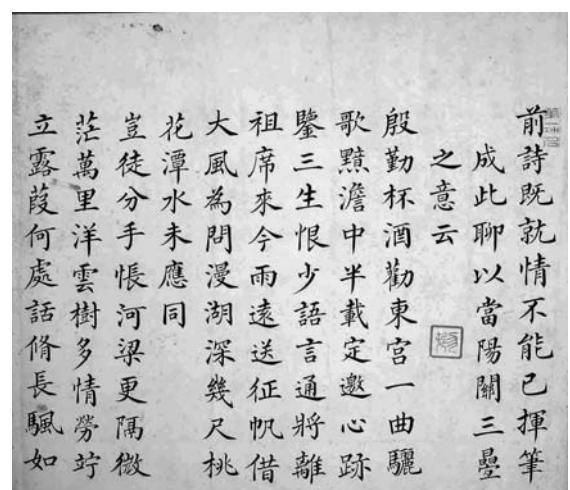
第五紙



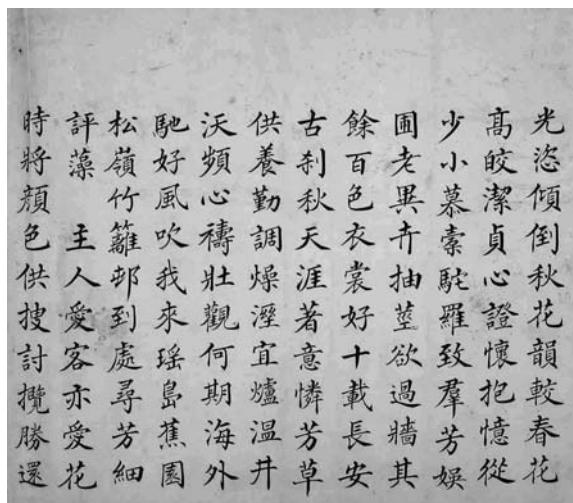
第七紙



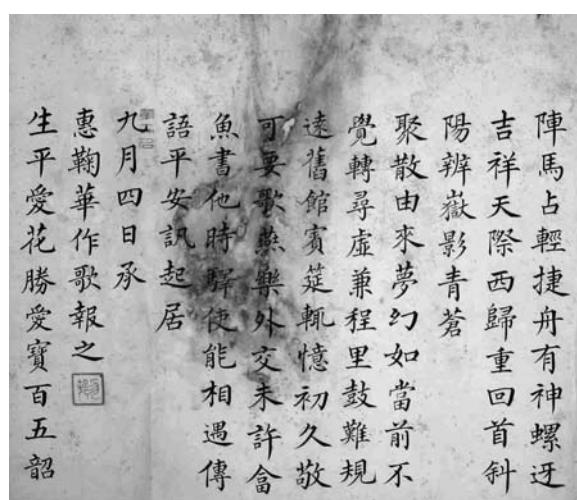
第八紙



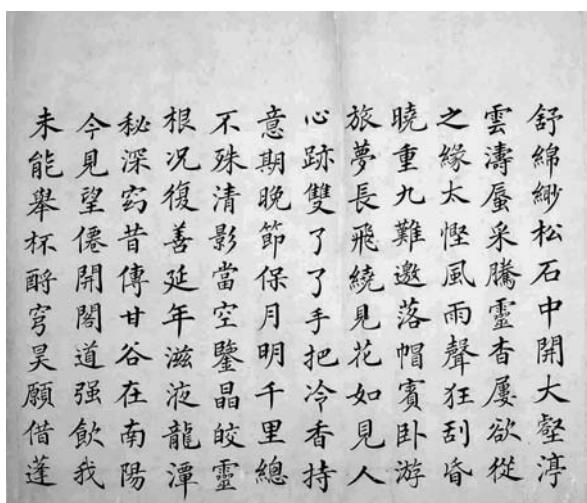
第九紙



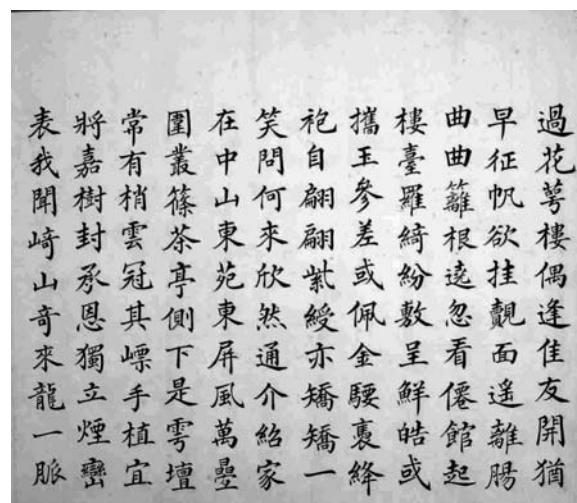
第十二紙



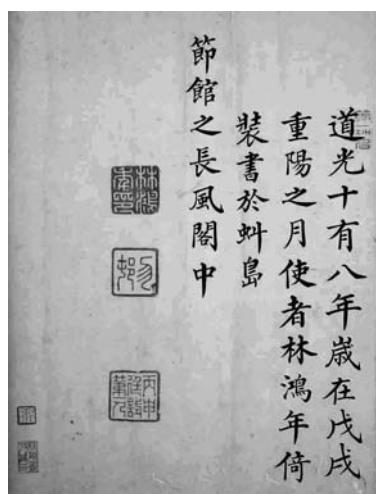
第十一紙



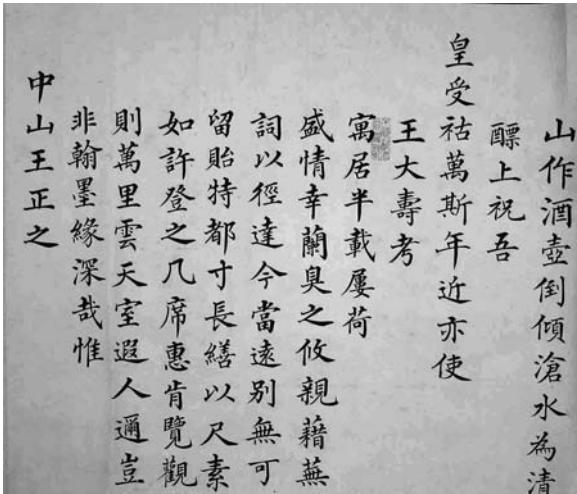
第十四紙



第十三紙



第十六紙



第十五紙

山作酒壺倒傾滄水為清
酬上祝吾
皇受祜萬斯年近亦使
王大壽考

寓居半載屢荷

盛情幸蘭臭之攸親藉蕪

詞以徑達今當遠別無可

留貽特都寸長繕以尺素
如許登之几席惠肯覽觀

則萬里雲天室遐人邇豈

非翰墨緣深哉惟

中山王正之

